

現代語における「くか」のある種の用法について

服部 匡

—

本稿では次のような「くか」を扱う。「か」に先立つ部分は節や体言相当の要素であったり、用言の「て」形その他の連用要素であったりする。また、不定語を含むこともあれば、含まないこともある。¹⁾

- (1) 何を思ったか、くるりと向きを変えた。
- (2) ところが近ごろは先祖帰りの現象か、窒息しそうな現代文明への反発で野生に戻りたいのか、原始人でも目をむくようなサル踊りみたいなのが大はやりだ。(西丸)
- (3) 喜ぶべきか、悲しむべきか、私のところまで順番がまわってこなかった。
- (4) 何が入らないのか、一言も口をきかなかった。
- (5) 奥さんは気をきかしてか席をはずしている。
- (6) 樹上でも白くて目立つ体色のためか、アシナガバチに捕食される率がひじょうに高い。(奥井)

右のような「くか」の用法を、ここで補充的用法と呼ぶ(7)―(12)のような用法と区別する。(7)―(12)で「くか」は、不確定事項に対するある関係(関係変化)・働きかけなどを表す述部と共起して、意味的にその対象を補充する働きをしているが(1)―(6)では話者の観点から、主文全体の内容に関連した何らかの疑念を呈示する役割を果たしている。²⁾

- (7) 太郎が来るかどうかはつきりしない。
- (8) 何が起こったのかすぐに分かった。
- (9) いったいどうなったのか、だれも答えることはできない。(西丸)
- (10) 太郎はもう来ているか(どうか)調べて下さい。
- (11) こうした筋書きのもとで、連邦制がどう維持されるのか、予測は難しい。(朝日 91.8.22)
- (12) しかし朝鮮の人々に取っては、日本の治下にあった当時に比べて、現在だけ生活状態の改善が見られたか、痛心に堪えない。(幣原)

便宜上、「か」に先立つ部分をQ、文全体から(二つ以上の)「Q」を除いた残りの部分をSで表すことにする。

Qが不定語を含まない場合、二つ以上の「Qか」がならべて提示されることもある。

- (13) いい加減いらいらするだろうと思って保又一雄は同情するのだが、神経が図太いのか音痴で同じ曲ばかりということがわからないのかそれとも行進曲が好きなのか、鎌田平造は平気で窓を開け放し、騒音の中で一日中原稿を書き続けている。(筒井)

本稿で問題とする「Qか」は常に一般の文中要素と同様自然下降に従う音調をとり、上昇調を取りえない点、文体面で必ずしも聴き手への配慮を要しない点で、聴き手に返答を求める独立の疑問文や(14)のような臨時に挿入された疑問文の「くか」とは異なる。むしろ、(15)、(16)のような、一種の自問を表す「くか」と共通点を有する。しかし、Qの形式・Sとの組合せに関して特有の制約を有することから、単純に(15)、(16)のような文が主文中に挿入されたものと見るのは適切でないと思われる。

- (14) 昨日三時ごろ—もつと早かったですか?—かなり大きな地震がありましたね。
- (15) この店は何でも売っている。ないものといったらたわしぐらいか。
- (16) (旗が立っている。)さて、今日は何の日だったか。

ただし、問題の「Qか」は、補充的な「くか」とも、(15)、(16)のような独立の文とも、互いに連続する部分を持っていることは否定できない。

Qが不定語を含まない場合、「Qかどうか」の形を取ることがある。ただし「Qか」と「Qかどうか」の使用条件は同じではない。「Qか」は、話者のQに対する肯定的な態度を含意しやすく、「Qかどうか」は、中立的かむしろ否定的な態度を含意しやすい。

例えば(17)のように、Qに対する話者の否定的な態度が読み取れる文脈では「どうか」を省くと不自然になるか文意を損なう。(18)では、「どうか」を省くことができるがその場合は話者のQを暗に肯定する態度がより強く感じられるようになる。一方、Qが話者の推測であるように感じられる(19)では「どうか」を加えるとむしろ不自然になる。

- (17) 本当にやる気があるのかどうか、いつも肝心の時に姿を現さない。
- (18) 子どものころからお寺の裏を見ているとああいうことになるのかどうか、頭のいい坊さんになればなるほど割り切っていて、「どうせ仏教はもうダメですよ」なんていつている。(司馬 日本人を考える)
- (19) 心労で寝込んでしまったのか、美保子の母親の姿はなかった。(筒井。自殺した娘の通夜の場面)

なお、補充的用法においても次のような相違がみられる。藤田(1983)も指摘するように、話者の期待度といった要因が関連すると思われる。話者の関心の偏りという観点から統一的に説明できる可能性がある。

(20) 太郎が来ている「うか/かどうか」知りません。

(21) 太郎が来ている「か/かどうか」調べて下さい。

「どうか」を伴う例は頻度がかなり低いこともあり、以下では「どうか」なしの例を中心に考察することとする。

二

「Qか」の内容が主文Sの内容に対してもつ関係は様々であるが、Qによって表現される、話者にとつて不確定な事柄の性質によって、次の三分類が可能であると思われる。

A Sに対する適切な評価や表現法についての判断の不確定

B Sを詳細化する情報についての認識の不分明

C Sの背後に存在する事情についての知識・判断の不確定
三類型とも、事柄をふまえてそれに関連する疑念を呈示する

という共通の性質を持つことから、Sはほぼ事実を述べる文に限られ、疑問文や命令・依頼・勧誘の文などは困難である。ただし、非分析的な否定疑問文(田野村(2008))や、確認要求の「〜だろう(しょう)？」、反語などの文は別である。

以下、順を追って検討していくことにする。

二・一

まず、Aの類型について例をみながら検討する。

(22) 「不幸か不幸か・喜ぶべきか悲しむべきか」私にはそういう経験がない。

(23) 幸いというべきか不幸にしてというべきか、くじには当たらずにすんだ。

(24) 折あしくというか、召集兵には折よくというか、部隊の風呂が修理中だった。私たちも部隊近くの銭湯にタオルひとつで出かけた。(朝日 91.8.16)

(25) どう言ったらいいのか、薦の仕事というのは自分の力量でいくところがあるからね。

(26) 胃の中をかき回されるようにも言ったらいだろう
か、ひどい痛みだった。

(27) 奉公したら直ると言われたんでご奉公してやりやあ
らうことかあるめえことか、てめえは、人殺しをしゃあ
がって、よくも、おれの前へそうして出てこられた。(圓
生)

事態Pをどのように評価すべきか、言い表すべきか、あるいは受け止めるべきかに関しての疑念を呈示するものである。評価を表すものでは、(22)―(24)のように二つの相対立する可能性を提示するケースが多い。また(22)のように一種の慣用表現をなしているものがある。(例えば(22)のような意味で「良いことか悪いことか」などとはいえず類例は限られている。)

やや特殊な性格のものとして、「PというかQ」の形で、Qに代わりうる表現Pを提示するものがある。一変形として、相手の発言などに現れた表現Pを受けて、より適切な表現Qを提示する意図で使用されることもある。

この類型では、他の二類型と異なり、次の例のように、単純推量の「だろう」(田野村1966)で終わる文をSとすることも不可能でない。

- (28) 幸か不幸か、ここに戻ることはもうないだろう。
(29) 縁がないとでも言うのか、もうここに來ることもないだろう。

また、特に評価を表すものは、(典型的な疑問文のSとは共起しにくいもの) 次例のように、相手の発言や状況そのもの、あるいはそれから推論して事実と思われることを踏まえてそれを確認するような疑問文(通常下降調)のSには収まりうる。

- (30) 幸か不幸かくじには当たらずにすんだ一人ですか・というわけですか。

また、表現法にかかわるものは、依頼を表す文とも共起することがある。

- (31) どう言ったら良いのか、もう少しこちらの立場も考えて頂けませんか。

二・二

次にBの類型をみることにする。

- (32) 戦争が終わったころだったか、原田の見舞いに行った(昭

和史、吉田茂)

- (33) いったつたか、山手線に乗っていると、目黒駅から乗り込んだ二人の酔っぱらい将校が、車中の乗客を全部立たせて、無茶苦茶な暴れ方である。(昭和历史)

- (34) 一つの新聞だったか、さるデパートの屋上からの婦人の身投げがあった時、行きずりの兵隊がと外套をぬいで死体にかぶせて立ち去ったという記事があったが、美しい話だと思った。(昭和历史)

- (35) 甲板へ出てから十分くらいだったか、しばらく手すりにつかまっていたが、それも続かず、波にさらわれて海中に落ちた。(昭和历史)

- (36) あの子ねえ、何という名前だったか、頭のよい子でしたよ。

- (37) 誰の句だったか、「——」というのがありましたね。

- (38) この大学だったか、不正が発覚して理事長がやめたところがあつたでしょう？

- (39) あたりが静まりかえって半時間もたつたころでしようか、母親が大声で、畑の端にある門のところと呼んでいるのが聞こえました。(朝日 91. 8. 15)

典型的にはQは「だったか」、「だった(だ)ろうか」等の形を取る。

多くの場合、「Qか」の後に「忘れ(まし)たが」を補ってもほぼ意味が変わらない。話者が知っている(通常過去の)事実Sに関して、その発生した時期その他の詳細情報に関する認識の

不分明を示すものである。ここでSは確実に知られている事態でなければならぬから、単純推量の「〜だろう」などはSになりえない。

Qとしては(32)―(35)のように時をあらわす例がもっとも多い。

場所や付帯状況をあらわす(40)、(41)のような例も理屈の上では考えられるが、実例は見当たらなかった。

(40) 学生時代に太郎の部屋だったか、すきやきをしたことがある。

(41) 太郎や次郎と一緒にだったか、野球の試合をしたのを覚えてる。

二・三

最後に、Cの類型の例を考察することにする。

事実Sを踏まえて、その背後にあると思われる事情に関しての疑念を呈示するものである。

Sは事実を表すものでなければならず、例えば、単純推量の

「『だろう』」の形の文はSとしておかしい。

(42) ?低気圧のせいかな、明日は雨がふるだろう。

(43) ?もう夏なのか、外は相当暑いだろう。

ただしいわゆる推量を表すものであっても、「『らしい』や『ようだ』」はSとして可能である。

(44) 低気圧のせいかな、明日は雨になるようだ。

(45) もう夏なのか、向こうは相当暑いらしい。

Qに表面上主語が欠けている場合、主文の主語と同一と解釈されることが多いが次のような例外もある。

(46) 天にいるのか、地にいるのか、この土地の聖霊のようなものに手厳しい叱責を受けている気のまま、カズさんの後を従って中に入り「略」(中上・Qの主語)「精霊のようなもの」)

以下Qの形式別に見てゆくことにする。

二・三・一 「〜のか」等

用例の中ではQが「〜のか」の形式のものが特に多い。

(47) 心労で寝込んでしまったのか、美保子の母親の姿はなかった。(筒井)

(48) 幕末、横浜の外国人たちはこの酔狂そうな医学じいさんを軽くみるところがあったのか、泰然を前に外交上の事柄について不用意なことをいったりした。(司馬 胡蝶)

(49) それにしてもこの事件、被害者のカネは後ろ暗いカネなのか7月30日現在、被害届は一件もなし。(Focus 91.8.9)

(50) そんな生い立ちが今もって出るのか、料理を手づかみで食べたか、ハダシで歩き回っていたか。(Focus 91.7.5)

(51) 彼の意識もカウンターの向こうにいつてしまったのか無表情だ。(ABRA 91-33)

(52) 誰が置いたのか菊の花が一輪目をひいた。
(53) 何を頼まれたのか、又八は茫としているだけだった。(吉川)

(54) どうしたのか、赤壁八十馬は、その日、姿を見せなかった。(吉川)

(55) いったい首の関節がどうなっているのか、うす闇から抜け出して市谷の前にあらわれた老作家はまたしても首をぐるぐると回転させた。(筒井)

(56) 戦後は、子どもをしかることは子どもの人権をそこなうものだとも思っているのか家庭の中でもゴゴト一ついわない。(西丸)

「のだ」の持つ、背後の事情を表すという基本的性質(田野村(196))と本表現類型とが良く親和するものと思われる。

特にQが不定詞を含まない場合は、ある事実を踏まえてその背後の事情を考えるという点で、「XらしくY」という表現と一種の共通点を有する。ただし、推量を表す「らしく」とは異なり、本類型の「〜のか」では、必ずしも両立しない二案を並べて呈示することもできる(57)。

(57) 夫人は不在なのか、奥で震えているのか、邸の中は静かだった。(筒井)

Sが話者にとって理解しがたい事柄の場合「Qか」はSの背後にあると思われる事情に関して強くいぶかる気持ちや非難めいた気持ちを表すことがある(55)、(56)。

次の各例のように、体言相当の要素Qを一案として提示する

こともある。なお、例えば(58)の「先祖帰りの現象か」のような例では、Qは、Sそのものを換言したものと、いう性格に近付く。

(58) ところが近ごろは先祖帰りの現象か、窒息しそうな現代文明への反発で野生に戻りたいのか、原始人でも目をむくようなサル踊りみたいなのが大はやりだ。(西丸)

(59) 『カタログ注文で きた弟』は、国際養子を迎える一家を描いていますが、外国人養子が珍しくないお国柄か、カルチャーギャップはあまり問題にされず、シンプルに新しい家族づくりのお話になっています。(朝日 91.10.11)

他に、頻度はさほど高くないが、「〜ものか」の形の類例もある。

(60) (薪を鹿に投げると)当たりどころが悪かったものか、ごろっ……倒れた。(圓生)

また、「〜わけか」の形の類例もあるが、「どういうわけか」などの形が多く、「文+わけか」の形のものはいくつか少ない。

(61) どういうわけか、傷口にわざわざ泥をねじこんで布を巻いている者もあった。(司馬 胡蝶の夢)

二・三・二 「〜せい」等

Sの理由、原因、事態の発端などに関する疑念を示すものである。「〜せいだろうか」などの形のこともある。

(62) これを聞いたためか、一月三十一日付の新聞にも、それが事実であるとしなければ考えられないような記事もで

ていた。(昭和史)

(63) この天才は下積み生活に耐えられなかったためか、ヒトリザルになり、六歳のとき海を泳いで対岸へ渡った。

(河合)

(64) (祖父がいつも時代劇を見ている) そのせいか、僕は時代劇が好きだ。

(65) 私の父親は海の近くで育ったせいか、サカナが大好物だった。(奥井)

(66) 十三日。宮内庁の発表が近いという情報からか、いよいよ、もの凄くなつて来た。(昭和史)

なお、森田 (1960) も指摘するように、「XせいでY」のYは少なくとも傾向としては「好ましくない」事態に偏るが、「QせいかS」のSにはそのような偏りは無い。

理由を表すものであっても、「〜の」はQになれない。「〜の」の形が許容されないことに対応している。

(67) あらかじめおおよその話を聞いていた「からか・?」のか、それほどショックを受けずにすんだ。

これら以外の連用要素、例えば、目的を表す「〜ため(に)」、付帯状況を表す「〜ながら」をQにした場合許容度は必ずしも高くない。

(68) (?) 家にかざるため(に)か、花を摘んでいた。

(69) (?) 音楽を聴きながらか、宿題を全部すませて持ってきた。

二・三・三 て形十か

(70) これを心得てか、同業者も、三越さんだけは二次会には誘わず、別格扱いにしているそうだから「略」。(昭和史)

(71) 奥さんは気をきかしてか席をはずしている。(昭和史)

(72) 「この人殺しめ」階下の家人に気づかせようとしてか膳上は大声で罵倒しはじめた。(筒井)

(73) それもあってか、本人はいたって強気。(Focus 91. 8. 16)

(74) 「略」毎日祈とうした。そのかいあってか、紀子さまは十月二十三日、無事にご出産された。(新聞記事)

(75) こうした事情を知ってか知らずか、氏は依然意気軒昂である。

用言のテ形の用法は多岐に渡るが、その中で、Qになりうる用法は限られている。多くの場合、他者である主体の行動や態度の背景にある認識その他の事情を推測するものである。

それ以外の「〜て」、例えば、手段、付帯状況、単純な前後関係などをあらわすテ形はQとなることが困難である。(次の例を参照)。

(76) ?パンを焼いてか食べたらしい。

(77) ?ラジオを聴いてか英語を覚えたそうだ。

二・三・四

実際の出現頻度は高くないが、文末に「の(ダ)」等を伴わない単純な文がQとなる例がある。

(78) A子さんは花嫁衣装が気になったか部屋に戻り煙に巻かれて死亡。(雑誌記事)

(79) 何思ったか、武者修行はそこへ座りこんだ。(吉川)

(80) 最近の学生は服装がなつとらんナと思つたか、それとも進取の精神や良しと思つたか、まじめな表情で証書を渡していた。(雑誌記事)

ここでQは、タ形が圧倒的に多く、ル形は多かれ少なかれ不自然になるようである。例えば次の例を参照されたい。

(81) 何を考えている「のか・?か」ちつとも言うことを聞こうとしない。

(82) よほど寒い「のか・?か」がたがた震えていた。

(83) 時間が気になる「のか・?か」しきりに時計を見た。

三

本稿では、「か」の三つの類型を指摘し、それぞれについてその特色と成立条件について考察した。

他にCの類型に通ずるものであろうが一種の慣用句として特別の意味を持つものに、「心なしか、思いなしか、気のせいかなどがある。

また、不定語を含むものうち(84)、(85)のような型、「どうにか(こうにか)、(錢を)なにがしか、いくらか、どんなにか、どれほどか、いつのまにか、いつしか(いつか)、何とか(かんとか)、なぜか、何か(87)、何だか、誰(何、ど)に」だったか+格助詞「か」などの表現の位置づけも考える必要があるが、今後の課題としたい。

たい。

(84) いつのころからか、この場所は城山と呼ばれるようになった。

(85) どこからか涼しい風が吹く。

(86) 隊長以下将校連が何か殺気だっているが「事情が」わからない。(朝日 91.8.14)

(87) 何か天と地が、逆さまになったような異様な雰囲気だった。(朝日 91.8.14)

用例の出典

奥井一満 タコはなぜタコになったか、河合雅雄 ニホンザルの生態、三遊亭圓生 圓生全集、幣原喜十郎 外交五十年、司馬遼太郎 対談集 日本人を考える、同 胡蝶の夢、筒井康隆 大いなる助走、中上健次 軽蔑、西丸震哉 イバルナ人間、朝日新聞 週刊朝日の昭和史、吉川英治 宮本武蔵

参考文献

尾上圭介 (1983) 「不定語の語性と用法」渡辺美編『副用語の研究』明治書院

国立国語研究所「永野賢」(1952)『現代語の助詞・助動詞』秀英出版

砂川有里子 (1988) 「引用文の構造と機能(その二)」『文芸言語研究(言語編)』

14

砂川有里子 (1986) 「引用と語法」『講座日本語と日本語教育』4 明治書院

田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152.

田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ』「のだ」の意味と用法』和泉書院

中田清一 (1984) 「疑問文のシンタックスと意味」『日本語学』 3-8

永野賢 (1952) 「から」と「ので」はどう違うか」『国語と国文学』 29-2

藤田保幸 (1983) 「従属句「〜か(トウカ)」の述部に対する関係構成」『日本語学』 2-2.

三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版

森田良行 (1990) 『日本語表現類型』創拓社

山口堯一 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院

Alfonso, Anthony (1980) 'Japanese Language Patterns', Sophia University.

注 (1) 「〜か」が慣用的な結びつきをなすもののうち、「〜どころか、〜ばかりか」のように一種の反語を表すものは一応考慮外とする。

(2) ここでいう補充的用法の「〜か」については、藤田 (一九八三) で

詳論されている。藤田も指摘するように、補充的用法の「〜か」の中には、格助詞を補って述語の項とすることができないものが含まれる。

(3) Alfonso (1980: 300) は、「明日は天気なのか空が夕焼けです」のよ

うな例をあげ、「後半に表現される事実や経験からその背後にある原因や理由を推測する(拙訳)」用法であるとしている。ただ、一般にQをSの原因や理由とするのは限定のしすぎであると思われる。

(4) およそ「どこからどこから」の関係が成り立つ。なお、理由は不明だが、現代語では、不定語の後に「から」以外の格助詞を伴う「どこにか、どこまでか、だれとか、いつまでか」などには同種の用法がほとんど見られない。

(はっとり・ただす 教養部)

「徳島大学国語国文学(一五号)」

著者別論文題目一覧 その三

徳島県三好郡山城谷アクセントの動向

後成卿女作者説への一疑問

本多 浩

室生厚星の履歴書

1号 森實美和 美化語についての意識調査

4

「青年思海」

3 徳島市の調査から

編集部より

前野昭人

言語感覚と人権意識

2 八木昌子 八木昌子 八木昌子 八木昌子 八木昌子

2

村松 龍

古文指導についての一考察

3 山本哲生 山本哲生 山本哲生 山本哲生 山本哲生

1

森 重幸

近世末期の木頭方言について

2 渡辺あゆみ 渡辺あゆみ 渡辺あゆみ 渡辺あゆみ 渡辺あゆみ

1

「阿波国漫遊記」より

「無名草子」小考

日を明記してください。